

第42回人権啓発 詩・読書感想文 入選作品集

みんなでかんがえよう みんなのじんけん



主催 / 大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)
協賛 / 江崎グリコ株式会社、大栗紙工株式会社(OGUNO)、
大阪地区トヨタ各社、関西エアポート株式会社(五十音順)

今回の入選者のみなさん



令和6(2024)年1月28日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)



大阪府広報担当副知事 もずやん

令和6(2024)年2月発行

主催 大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)

目次

第42回入権啓発詩・読書感想文
募集・表彰事業について……………2

詩の部門

小学校(小学部)低学年の部

わたしはわたし……………4
悪口……………6
大切なこと……………8
大阪大空しゅう……………10
男・女はかんげいない……………12
みんなのちがひ……………14
なみだをながすと……………16
言葉の力……………18

小学校(小学部)高学年の部

みんなのあたたかい心……………20
ぼくの親友……………22
なにをしているの……………24
色よ かがやけ……………26
虹……………28
自分の意見を……………30
これって……………32
いじめは、ダメ……………34
赤……………36

中学校(中学部)の部

私へ問う……………38
平和のためにできること……………40

読書感想文の部門

小学校(小学部)低学年の部

「ぐるんぱのようちえん」を読んで……………42
「わたしのヒロシマ」を読んで……………44

小学校(小学部)高学年の部

「ぼくたちのコンニャク先生」を読んで……………46
しあわせのバトンタッチ……………48

中学校(中学部)の部

多様性が認められる世界……………50
苦しむ必要がなかった人々……………52
そんな未来になるといいな……………54
今後の未来に届け……………56
もっと自由に、もっと多様に……………58
戦争の意味とは……………60
幸せを感じるには……………62
講評……………64

寝屋川市立神田小学校	6年	うへだ 上田	あいり 愛莉
寝屋川市立宇谷小学校	6年	すみもと 住本	せいご 聖悟
箕面市立西南小学校	6年	たちほな 橘	ゆい 優衣
寝屋川市立点野小学校	6年	よしざわ 芳澤	さき 咲希

中学校(中学部)の部

泉南市立信達中学校	1年	むかい 向井	みさき 皆咲
吹田市立豊津西中学校	2年	くりもと 栗本	あいら 彩衣来

読書感想文部門

小学校(小学部)低学年の部

大阪市立苗代小学校	3年	おがわ 小川	ざき 彩希
泉南市立雄信小学校	3年	こんの 今野	あこ 彩心

小学校(小学部)高学年の部

岬町立多奈川小学校	5年	かわい 河合	りつき 璃々希
泉南市立一丘小学校	5年	でぐち 出口	なな 夏渚

中学校(中学部)の部

堺市立津久野中学校	2年	さかい 澤井	りほ りほ
交野市立第四中学校	2年	たなか 田中	こころ 心菜
守口市立庭窪中学校	2年	もり 森	ゆづき 結月
交野市立第二中学校	3年	かい 甲斐	あやさ 彩咲
交野市立第二中学校	3年	さやま 佐山	ゆりな 由理菜
交野市立第二中学校	3年	にしおか 西岡	あん 杏
交野市立第二中学校	3年	ひがしたに 東谷	な 菜緒

○表彰式

令和6年1月28日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)

第42回人権啓発詩・読書感想文 募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内在住・在学の小・中学(部)生から募集しました。

○主催

大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)

○募集期間

令和5年7月3日(月)～9月1日(金)

○応募、審査

詩部門・読書感想文部門合わせて457作品の応募があり、審査会において30作品を入選としました。

詩部門

小学校(小学部)低学年の部

泉南市立東小学校	1年	はっとり 服部	ゆのは 柚果
和泉市立黒鳥小学校	3年	いしげ 家重	みどり 緑
吹田市立片山小学校	3年	いのうえ 井上	あやの 綾乃
阪南市立桃の木台小学校	3年	かたやま 片山	りょうこ 綾子
和泉市立黒鳥小学校	3年	さいとう 斉藤	かなえ 叶笑
和泉市立黒鳥小学校	3年	とみた 富田	らいと 頼人
阪南市立西鳥取小学校	3年	はざま 陌間	しおん 心響
泉南市立東小学校	3年	はっとり 服部	ほのか 桜果

小学校(小学部)高学年の部

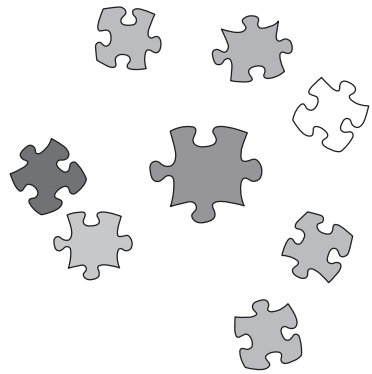
寝屋川市立堀溝小学校	5年	こみ 五味	ゆずき 柚希
泉南市立東小学校	5年	ないとう 内藤	こうだい 晃大
大阪市立関目東小学校	5年	なかの 中野	ともき 友喜
茨木市立穂積小学校	5年	ながやま 長山	ひかり 光里
寝屋川市立第五小学校	6年	いわた 岩田	あつし 篤志

わたしはわたし

泉南市立東小学校 一年 服部 柚果

あのねあのね
もしもわたしがパズルだったら
きらきらで みずいろで
おっきいピースになりたいな
わくわく どきどき
まだかな まだかな
わたしのでばんは まあだかな
あれあれあれれ でばんがこない
でばんがないとかなしいな
そうだ さがしにいつてみよう
こっちなかな そっちなかな
あっちなかな どっちなかな
きらきらはだめだつて

みずいろはちがうつて
おっきいのはじゃまだつて
どうして どうして おんぶんぶん
ぼろぼろ ぼろぼろ なみだがでるよ
ずっとひとりはさみしいな
そのとき
どうした どうした
いろんなピースがやってきて
くふうをすればだいじょうぶ
きょうりよくすればだいじょうぶ
ピタピタピタッ
はまった はまった いいきもち
にっこりにここに ピョンピョンしちゃう
うれしい うれしい ありがとう
いろも かたちも おおきさも
みんなちがっていいんだね
わたしはわたしでいいんだね
みんなといられてうれしいな



悪口

和泉市立黒鳥小学校 三年 家重 緑

世の中にはいろいろな人がいる
たとえば女の子になりたい男の子
男の子になりたい女の子

世界にはいろいろな人がいる
一人一人ちがう
それはべつにへんじゃない
自分のありのままにいきているから

それに対して悪口を言う人がいる
なんで言うの

それを見た人がきずつくかもしれないのに
その人の人生なのに

自分が思っている事を素直に言うのはいい
だけど悪口を言っではいけない

そのひと言で
言われた人が

「自分はいらぬ」
そう思うかもしれないから

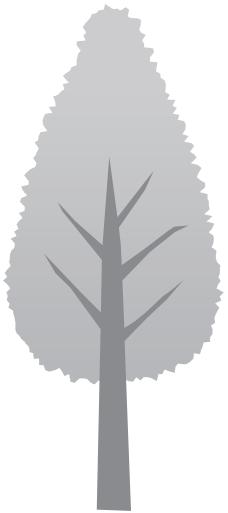
そのひと言で
人がいなくなっていくかもしれない

そう思うと人間はこわい

みんなはどう思うかな

たった今も

人や動物、植物がいなくなっているかもしれない



大切なこと

吹田市立片山小学校 三年 井上 綾乃

わたしのこと

いいなと思ってくれるひとも

いれば

わたしのこと

いやだなんて思うひとも

いるかもしれない

それでもわたしがわたしを

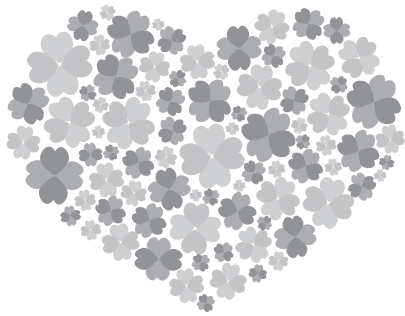
大すきでいれば

きつとだいじょうぶ

自分の大すきを大切にすれば

もつといいなのわが

広がる気がするんだ



大阪大空しゅう

阪南市立桃の木台小学校 三年 片山 稜子

市やく所に、大阪大空しゅうの体けん画を見に行った。
心が、ずうんと、重くなる。

絵は、気持ちでかく。

どんな気持ちでかいたのか。

どれだけ考えても、黒い中で心はとまる。

かたにかけた水とうが、いつもより重い。

8月の登校日は平わ学習をする。

「こわいから休みたい」

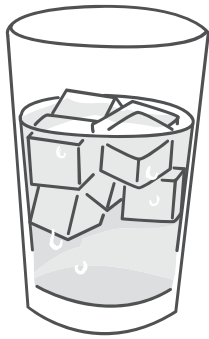
ああ、それじゃだめなんだ。

たくさん知らないといけない。

くりかえさないために。
つたえられるために。

毎年そなえられる氷水。

来年は、私が。



男・女はかんけない

和泉市立黒鳥小学校 三年 斉藤 叶笑

男・女はかんけない

だれがどうしてもかんけない

あの子はあの子

この子はこの子

みんな違っていい

男が男を好きでも

女が女を好きでも

おかしくない

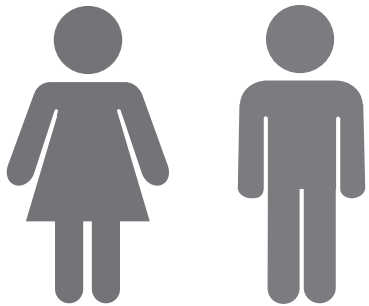
自分のふつうは

他の人のふつうではないかもしれないよ

だから

自分のふつうをおしつけないで！

男・女はかんけない



みんなのちがい

和泉市立黒鳥小学校 三年 富田 頼人

ローマ字がとく意な人と

とく意じゃない人がいる

苦手なこともちがう

運動がすきな人と

すきじゃない人がいる

しょうがいがある人と

そうでもない人も

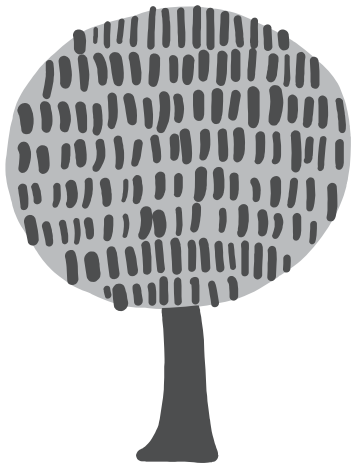
みんな同じ

だれかをきずつける人は、

弱い

みんなのちがいが

いいのにな



なみだをながすと

阪南市立西鳥取小学校 三年 陌間 心響

人間は

いやな時

つらい時

けがをした時

うれしい時

いろんな時になく

いやな時つらい時のなみだは

むねが苦しくなる

けがをした時のなみだは

心もいたくなる

うれしい時のなみだは

ワクワクする

うれしいなみだをいっぱい流したら

心がどんどんあたたかくなるだろうな



言葉の力

泉南市立東小学校 三年 服部 桜果

あたり前だけど 大切な事なあんだ
誰からもらっても うれしい物なあんだ
ちよつとの勇気で 笑顔になる物なあんだ

なあんだ なんだ

それは なんだ

それはあ あいさつ

おはよう こんにちは

ばいばい またね

それから ほかにも こんな言葉

いただきます ごちそうさま

ごめんね ありがとう

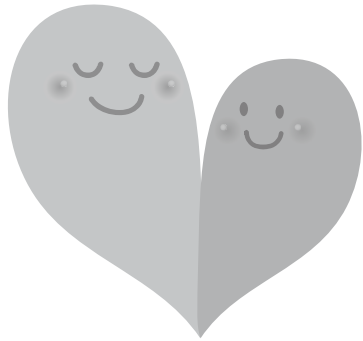
どんな時でも 自分から

どんな人にも 自分から

笑顔で元気にハキハキと

一人ぼっちをやっつけろ





みんなのあたたかい心

寝屋川市立堀溝小学校 五年 五味 柚希

学校の帰りに虹を見た

虹を見ると心があたたかくなるよ

空に天使が横切っている

虹は一色じゃなれないんだよ

私には天使のような友達がいる

悲しいとき虹のように心を輝かせてくれた

私も誰かを

輝かせる心をもつ

次は私が友達を助ける番だ

ぼくの親友

泉南市立東小学校 五年 内藤 晃大

たろう君は いつも 絵を書いている
ゲームの絵

たろう君は いつも 本を読んでいる
本のキャラクターの絵

その絵は いつもおもしろい
たろう君は不思議いつも変なことをいつている

たろう君は人形が好きだ
人形といつもねている。

人形をいつもはなせない。

たろう君は スカートをはいている

そんなたろうくんが不思議だ

だけど ぼくの親友だ。

たろう君は個性的でおもしろい



なにをしているの

大阪市立関目東小学校 五年 中野 友喜

なにをしているの

仲間はずれにしたり

持ち物をかくしたり

なにをしているの

トイレにとじこめたり

ぼう言を言ったり

昔も今もいじめはなくなっていない

なにをしているの

ぼくたちはもう変わらないといけない

やさしい世界をつくらないといけない

なにをしているの

今からでもおそくない

未来を変えていこうよ



色よ かがやけ

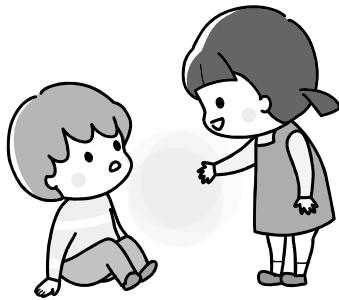
茨木市立穂積小学校 五年 長山 光里

人はみんな
ちがう色を持っている
好み 思い 考え
目には見えない
それらのものが
合わさってできた
たった一つの色を

同じ好み
同じ思い
同じ考えの人も
いるだろう
そんな時は
仲を深めよう
きつと
自分の色が
こくなるだろう
自分とは
似ていない人も
いるだろう

そんな時は
相手のことを知ろう
たくさん話そう
きつと
自分の色に新たな色が
追加されるだろう

正解の色も
良い色も
存在しない
どの色も個性があり
すてきな色だ
相手の色を認め合い
ほめ合えば
きつと
どの色も自信を持って
かがやくだろう
さあみんな
たくさん色を
かがやかせよう



虹

寝屋川市立第五小学校 六年 岩田 篤志

虹はめずらしい
みただけで幸せだ
虹にはいろいろな色がある
一色だけじゃあじけない
七色だから輝くんだ
クラスもいろんな人がいる
おもしろい人
静かな人
おしゃべりな人
いろいろなから盛り上がるんだ

ぼくが生まれた日
大きな虹がでたって聞いた
ぼくはいろんな人と
いっしょに輝ける人になるんだ



自分の意見を

寝屋川市立神田小学校 六年 上田 愛莉

人権とは生まれたころから持つ権利

私はそう思う

私は物を選ぶ時

「何でもいいよ。先に選んで。」

と言ってしまふ

でもそれは自分の意見をさせていない

分かっているのに言ってしまう

ある時おばあちゃんに言われた

「ちゃんと自分の意見を示しなさい。」と

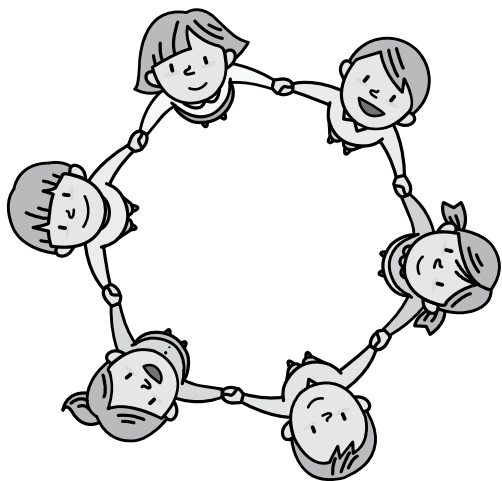
だから私は思った

意見を示すことは

自分を示してくれることだと

自分の意見を示すことも

人権があるから出来るんだ



これって

寝屋川市立宇谷小学校 六年 住本 聖悟

自分がしているのに他の人にきつく言う。

これってええと思うん？

ある人にだけきつく言い、他の人にはやさしく言う。

これってええと思うん？

ある人の話だけ無視する。

これってええと思うん？

ある人にだけ「貸して」と言われて「いや」と言い、

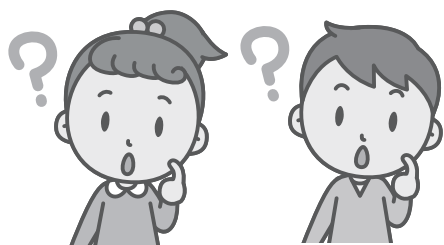
他の人に「貸して」と言われたら「いいよ」と言う。

これってええと思うん？

みんな人間。自分も人間。人としてみんな平等。

なのに、こんなことしていいと思うん？

これってええと思うん？



いじめは、ダメ

箕面市立西南小学校 六年 橘 優衣

私は、いじめがきらい

しゃべりかけても、無視される

無視されたら、悲しい

私は、いじめがきらい

聞こえるところで、かげ口を言われる

かげ口を言われたら、悲しくなる

私は、いじめがきらい

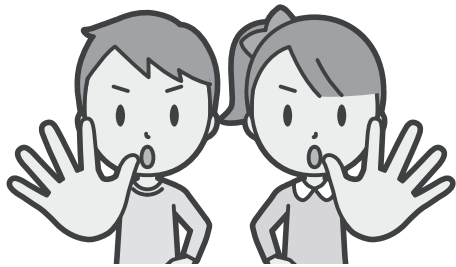
教科書に、落書きされる

落書きされたら、悲しい

だから、おたがいの話を聴く

そして、相手の気持ちを考える

考えて、行動する



赤

寝屋川市立点野小学校 六年 芳澤 咲希

赤は元気になれる色

赤は希望をくれる色

赤は輝くおひさまの色

見てるとなんだかあたたかい

赤は飛び散る火花の色

赤はふきだす血液の色

赤はふりゆく爆弾の色

なんだかとっても悲しいな

赤は元気になれる色

赤は悲しくなっちゃう色

赤はなんにでもなれる色

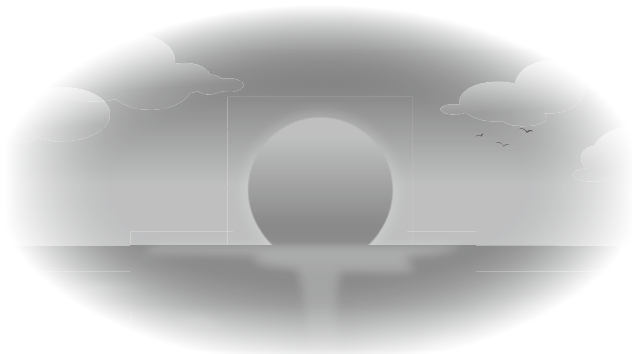
赤はなんにでもなっちゃう色

赤が悲しくならないように

赤が苦しくならないように

かなしい赤をつくらないで

かなしい赤をわすれないで



私へ問う

泉南市立信達中学校 一年 向井 皆咲

きずつけきずつけられている人を見ると
うつむく私がいる

きずつけられた人を見るのがつらいのか
見て見ぬフリがしたいのか

助けに行く勇気がない罪悪感なのか
よくわからない

もうしばらくして顔をあげる
きずつけられた人は笑っていた
ほっとする私がいる

でも心の中はどうなんだろう
ほんとはつらいのだろうか
わたしはいつも考えすぎるのかな
誰もかなしまない毎日がいい
それはよくばりなことなのかな
私にできることが知りたい



平和のためにできること

吹田市立豊津西中学校 二年 栗本 彩衣来

わたしは平和

穏やかだから 静かだから

協調性があるから

本当？

目を開けて 心をみて

傍観者になってはいないだろうか

無関心になってはいないだろうか

まずは隣の人にそっと寄り添う

彼女のSOSに気づけるように

彼がSOSを伝えやすくなるように

わたしの平和は実在し

友人や家族 大切な人

みんなの平和が日常となり

広がるように



「ぐるんぱのようちえん」を読んで

大阪市立苗代小学校 三年 小川 彩希

ぐるんぱは、とても大きなぞうです。

いろいろなお店や工場にはたらくにきましたが、作る物が人間には大きすぎて、どこもことわられてしまいました。

でも、12人の子どもたちに出会って、ピアノをひいてあげたり、大きなバスケットをちぎって分けてあげたりしました。

わたしが一番好きな場面は、さい後にぐるんぱがようちえんをひらいて、子どもたちと楽しく遊んでいるところです。今までぐるんぱが作った物は大きすぎたけど、大きなくつでかくれんぱをしたり、大きなお皿をプールにして遊んだりして、たくさんの子どもたちが大よろこびしました。「ぐるんぱは、もうさみしくありません。」という文のとおり、ぐるんぱはとても楽しそうです。作った物も、がんばったことも、むだじゃなかったなと思いま

した。

このお話の中に、さべつはある、とわたしは思います。ぞうは体が大きくて、作る物も大きいので、人間のところで仕事をしてもうまくいきません。つかえない、買ってもらえない、けつきよくはたらきつづけれない。

しょんぼり、しょんぼり、またむかしのように、なみだがでぞうになったぐるんぱ。ひとりぼっちでくらすしていたころ、

「さみしいな、さみしいな。」

と書いていました。だれにもうけいれてもらえないから、さみしい気持ちにはかわらないんだな、と感じました。

もし、ぐるんぱが作った大きなバスケットを、お店のかんばんにするなど、べつのほうほうで使ったりしてもらえていたなら、ぐるんぱがこんな気持ちにならなくてすんだのではないか、と思います。自分のつごうだけでなく、あい手の気持ちを考えることが大切だなと思いました。

わたしも、学校でおいしいなと思ったことがあります。ドッジボールをしていたとき、あい手チームの男の子たちが、

「あの子は弱いから、ねらわなくていいやんか。」

と言っていました。そして、ドッジが強い子はかりねらっていました。ねらわれずにコートにのこっている子たちがつまらなそうでした。

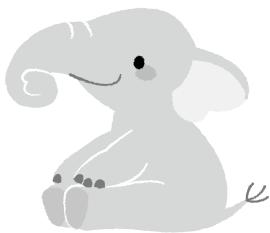
それを見て、あい手によつてたい度をかえないで、強い弱いかんけいなく、みんなで楽しくできたらいいなと思いました。

これからもみんなでえがおですごせるように、わたしはあい手の気持ちを考えて、友だちのようすがおかしかつたら声をかけたいです。

「ぐるんぱのようちえん」

著 西内 ミナミ

福音館書店



「わたしのヒロシマ」を読んで

泉南市立雄信小学校 三年 今野 彩心

この本はヒロシマが戦争にあう、こんなお話です。どうしてこの本を読もうと思ったかというと、平和学習で戦争のことについて考えなければ、もう一度しんげんに考えてみたかったからです。

この本を読んで、私の心に残ったことは、死んでしまっただ母親にすがりついて、

「おかあさん」

と、さげんでいる女の子の場面です。私はとても悲しい気持ちになりました。なぜなら、もし大阪でも戦争がはじまり私のお母さんが亡くなったらお母さんのいない人生なんて考えられないからです。

また、年齢にかんけいなく戦わなくちゃいけないのが本当にかわいそうでした。

私や私の兄弟がもし1945年に生きていたら、と思

うとそうぞうしただけで怖くなります。今でもロシアとウクライナが戦争をしています、もう二年もたちました。

人の命をたくさんうばっているのに私は、

「まだ気づかないの」

と、思います。

「本当に戦争やめて、お願い」

と心で願いました。世界中の人が安心できるそれが平和だと思います。

「わたしのヒロシマ」のお話を読んで、わたしは家族全員のことを考えました。理由は死んでほしくないからです。私は実さいに戦争をたいけんしていないから本当の怖さを知らないけど、この本を読んで戦争がどれだけたくさんさんの命をうばい、家族や友達とはなればなれになって、つらい思いをするのかが分かりました。戦争はぜったいにしてはいけないと思います。

「わたしのヒロシマ」
著 森本 順子
金の星社



「ぼくたちのコンニャク先生」を読んで

岬町立多奈川小学校 五年 河合 璃々希

ぼくがはじめて「障がい」という言葉を聞いたのは、二年生の時でした。目の見えない人とあつたときです。

ぼくは、ぼくのこと「発達障がい」という言葉を聞きました。それを聞いた時、心の中で、「みんなとはちょっと、ぼくは違うんだな。」と、思っちょつとショックを受けました。

ぼくは四年生の時、全盲のししもとさんと、三年生の時、脳性マヒの水島さんに会いました。水島さんには詩をプレゼントしてもらいました。ししもとさんには、点字を教えてもらいました。

コンニャク先生の障がいは、手が動きません。だから足で絵を描いています。足で何でもしているのです、すごいです。特に、足の指ではさみを使ったり、折り紙を折ったりできています。コンニャク先生の障がいは人にわかってもらえます。

らえます。

ぼくは、パニックになったりします。一番心に残っているのは、お母さんに買ってもらった筆箱をハサミで切ってしまったことです。色鉛筆もボキボキに折りました。ぼくの大切な魚の絵もビリビリにやぶって投げました。

イライラが止まらないことや、相手を傷つけたいと思うことがあるけど、手を出さないようにするけど、ストレスがあふれ出してくるのが止まらないようになる。その時、友達にぼくをどう見ているのだろう。Kはきつとばかりじゃない？と思っっているかも、Sはだいたいぶつぷつて優しく見てくれていると思う。そしてTは悲しくぼくを見ていると思う。Uはこういふことにならないで楽しく遊べないの？と励ましの目で見てくれている。Hは優しく大丈夫？といつも支える気持ちで。みんながきつことも、冗談も言ってくれている。本当は感しゃしています。

これからは、ぼくはもちあじを持っているけれど、ちよつとずつ、みんなと成長していきたいと思っます。

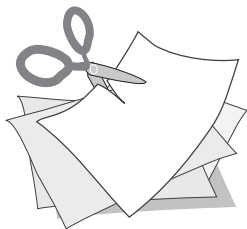
ぼくには弟がいます。弟も発達障がいです。弟とも、

家で、野球とか仲良くかかわりたいです。

自分にとつて家族、お姉ちゃんやお母さん、弟もやっぱり大好きで、お母さんを支えたり、兄弟で支え合つていく家族を作つていきたいと思っます。

コンニャク先生は、いつも笑つていました。ぼくも笑つていたいんです。

「ぼくたちのコンニャク先生」
著 星川 ひろ子
小学館



しあわせのバトンタッチ

泉南市立二丘小学校 五年 出口 夏渚

私の将来の夢は、動物園の飼育員になる事です。動物の事をたくさん知っておかないといけないので、動物に係る本を読もうと思っていました。すると「しあわせのバトンタッチ」という障がいのある犬の本を見つけました。私の周りでは障がいのある犬を見かけないので、この本に決めました。

この本は「未来」という障がいのある犬の話です。後ろ足が切り取られ、右目の下が切り取られていて虐待の可能性があり、捨てられていました。そんなところを著者の今西乃子さんが引き取って飼う事になりました。それから小学校や中学校や少年院などに未来を連れていき、命の可能性と自分を好きになる事の大切さを伝えるために授業をしていく話です。

この本で特に心に残った事は二つあります。一つ目は、今西さんが生徒に言った言葉です。動物愛護センターで保護された時の未来の写真を生徒に見せると、「気持ち悪い」「きたない」と言う声が聞こえました。すると、「

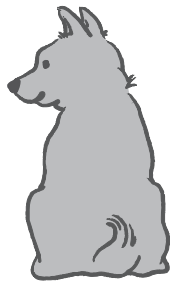
人の生徒が、「同じ犬なのにこんなに変わる事ができるなんてすごいよ。」と言った事に対して、今西さんは「これが命なんじゃないかな。生きてるってそういう事なんだと思うよ。生きてる事がチャンス。生きてるからこそ変わる事ができる。今でも未来のような犬が殺処分されている。きっとその子達も生きていれば変わる事ができるんだ。そして、私達は誰かを幸せにする力を持っている」と言った言葉です。今西さんが言った言葉すべてにとっても納得しました。

二つ目も、今西さんが生徒に言った言葉です。「命にかえはない。だから大切にしてほしい。守ってほしい。みんなの命、そしてみんなの「一人の未来を」です。この言葉を讀むと、今西さんが本当に命を大切にしてほしいという事がとてもわかりました。

私はこの本を読んで、命の大切さがわかりました。命にはかえがないので、大切にしようと思いました。未来は人間から虐待を受けてとても辛い思いをしたと思います。でも今は楽しく過ごしていて良かったと思います。でも助けられる命がある動物が他にもたくさんいるので、全ての動物の命が救われる世界になればいいと思いました。私も辛い事や、しんどい事があるけど、未来のようにが

んばつていこうと思いました。命があるかぎりぜつたいにあきらめてはいけません。改めて命はとても大切だと思いました。大切な家族や友達にもこの本を読んでもらって、命の大切さを自分だけではなく、みんなに知ってもらいたいです。

「しあわせのバトンタッチ」
著 今西 乃子
岩崎書店



多様性が認められる世界

堺市立津久野中学校 二年 澤井 りほ

「僕の名前はオーガスト。外見については説明しない。きみがどう想像したって、きっとそれよりひどいから。」その二文を読んで私はその文が持つ意味に疑問を抱きました。しかし、それは生まれつきのものでした。もし私がそうならば明るく生きられないと思います。最初は、オーガストは周りから自分の顔に対する悪口などにめげないで、常に明るく生きているという話かと思いました。しかし、オーガストは私たちと同じひとりの人間で、悪口を言われる度に傷つくことがあることに驚きました。

R・J・パラジオの著作である、「ワンダー」は、差別や偏見をなくし、人々が互いに理解し合うことの重要性を訴えかける作品であると感じました。この物語は、主人公であるオーガスト・プルマン自身が成長してきた流れが細かく描かれています。物語の最初はオーガスト視点での物語があり、終盤にかけて、家族や他の生徒視点からの物語が綴られているという面で、とても面白い作品

だと思いました。

オーガスト・プルマンは生まれながらにして顔に障がいを抱え、幼少期から多くの手術と苦難を乗り越えてきました。子供の頃、学校に通えるようになるまで、親から家庭での学習を受けてきたこともあり、勉強では問題なく学校生活を送ることができ、彼の外見を理由にした差別やいじめに日々直面してしまいます。友達を作ることが難しく、クラスの仲間たちから外される恐れや同調圧力からくる孤独感を味わう場面も描かれています。

しかし、周りからオギーと呼ばれるオーガストの内面はとても魅力的で、彼の勇敢な行動力や、学校でのいじめに屈せず、立ち向かう姿勢は、私には想像できないくらいに精神力を感じさせます。彼の物語は、私たちに困難に立ち向かう力や希望を持つ大切さを教えてくれました。そして、この小説はオギーの物語だけでなく、彼を取り巻く人々の視点も織り交ぜられています。彼の家族や友人たちの思いやりのあるサポートや、最初は彼のことが理解できなかった人々が変わっていく様子が丁寧に描かれています。これによって、人間関係の複雑さや成長

の過程がリアルに伝わり、読者は登場人物たちと共にそれぞれの感情や心情の変化や移り変わりを体験することが出来ます。様々な登場人物の視点を、読んでいくうちに、必ずしも「良い」「悪い」で割り切る場面だけではない部分があることに気づきました。それぞれの登場人物にとつての正義があり、二つ々の行動に根拠や理由付けがあることもこの物語を障がいを持つ人への偏見をなくしてハッピーエンド、というような単純なものには終わらせないようにしている理由の一つであると感じました。

「ワンダー」は、現代社会において特に重要なテーマである共感と理解の大切さを私たちに考えさせる作品だと感じました。物語は、ときどき孤独を感じる現実世界において、希望の光を灯し、私たちが互いに思いやりを持ち、共感し合うことの重要性を考える機会を与えてくれます。違いを乗り越えて、互いに寄り添うことで、美しい多様性がもたらす豊かさを実感しました。また、この本を通じて、私は自分自身を振り返り、他人に対する思いやりを深めていく必要性を再認識しました。物語から学んだ教訓を日常に活かし、より思いやりや共感のある社会を築くために努力していきたいと思っています。この本を読むことで、私の人生の中での意識が変わりました。自分自身や周りの人々との関わりにおいて、偏見や

差別をなくし、お互いを理解し合う姿勢がいかに大切かを強く感じました。また、物語の登場人物たちの変化や成長を通じて、人は過去の固定された見方や偏見を超えて、新しい視点を持ち、成長することができることを学びました。「ワンダー」は、単なる物語でなく、現実社会においても私たちにメッセージを伝える力を持っていると思います。

この作品を通じて、私は他人に対する思いやりや共感を持ち、みんながより広い心を持つような世界を築いていくために積極的に行動する意欲を養うことができました。未来に向けて、「ワンダー」から得た教訓を胸に、より良い社会の実現に貢献していきたいと思っています。

「ワンダー Wonder」

著 R・J・パラジオ
訳 中井 はるの
ほるの出版



苦しむ必要がなかった人々

交野市立第四中学校 二年 田中 心菜

私は「夏の葬列」を読んで、この物語に出てくる人々は、戦争がなければ苦しむ必要がない人々だったのに……と思いました。

登場人物として出てくる彼は、昔にあった戦争で苦しんでいました。彼は自分を守ろうと必死になり、ヒロ子さんという女の子を、自分を助けにきた女の子をわざわざ銃撃の下に突きとはし、殺してしまったのだと心に深い傷を負っていました。何年もたったある日、彼は女の写真が置かれている柩をかついで葬列が行われているのを見て、その写真には昔のヒロ子さんの面かげがあり、彼は「人殺しではなかったのだ」と安心しました。ですがその人はヒロ子さんの母で、ヒロ子さんが亡くなってしまった悲しみから、自ら川にとびこみ命を絶つてしまいました。

私は、これから彼はこの二人の死に心を痛めながら生きていかなければならないのだろうか、この二人の死は彼の責任なのか、戦争がなければこの二人が亡くなることも、彼が苦しむこともなかったのではないかと思います。彼がヒロ子さんを突きとばしたのは、自分自身を守るた

めに必死だったからで、きっと私も同じことをしてしまうと思います。ヒロ子さんの母も十数年間、ヒロ子さんの死に苦しみ続けていて、その苦しみから逃れるために自ら命を絶ちました。彼もまた、この二人の死に苦しみ続けていかなければなりません。ですが私はこの二人の死は彼の責任ではないと思います。そもそも戦争がなければ人々が苦しむことも、亡くなることもなかったはずで、それなのに、国どうしが争いをおこすことで、国民が犠牲になることはおかしいと思います。大人は子供を守るもの、国は国民を守るという義務があると私は考えており、多くの命が絶えることなく、次の世代に受け継がれていくべきだと思います。そのためには、相手が相手进行い合い、互いに人権を尊重することが大切だと思います。人権とは「人間が人間らしく生きるために生来持っている権利」という意味で、人間が自由に安全に暮らすことができるといわれている中、戦争によってたくさんの人々がこの「人権」を奪われてきたのです。

戦争はしないとされている国もありますが、実際世界の国々の間ではウクライナとロシア連邦のように戦争をしている国もあります。私は、「戦争はしない」と言うだけではなく、戦争をしている国や、しようとしている国、核兵器を持っている国、使おうとしている国を止めたり

することが大切だと考えています。クラスで協力する場合も、一人一人がお互いのことを考えて行動するとうまくいくように、世界全体でも同じようにお互いを考えて行動していけば、きっと良い国になっていくと感じています。

ですが、国どうしでもケンカすることが絶対あると思います。なので私は周りの国々が間に入って止めてあげることがとても大切なことだと考えています。また、国内で起こる「内戦」もその国だけでは止められない場合があります。内戦も立派な戦争であり、これもまた、たくさん人の命が犠牲になる、残酷なものです。このように、国は国民の命を守り、安心して暮らしていけるような国にするべきだと思います。

私は、国どうしの争いで人間が一人でも命を落としてしまうと、それでも国が「国民が安心して暮らせるようにする」という義務を果たせていないと感じています。戦争は、たとえたった二日だったとしても、してはいけないことで、少しでもしてしまつたらダメだと思っています。何度も言いますが、私は戦争を防ぐためには、相手の国と国がお互いに文化や考え方を認め、お互いに学びあうことで相手を理解し、争いを起こさないことが大切だと考えています。この世界から戦争がなくなれば、全世界の人々が安心して、幸せに暮らせるようになると思います。

した。私は地球から一つも争いの起こらない、平和な世の中になることを願っています。

著 「夏の葬列」
山川 方夫
集英社



そんな未来になるといいな

守口市立庭窪中学校 二年 森 結月

あなたは、『死にたい』と思ったことがあるだろうか。私が、今回読んだのは、『死ぬんじゃねーぞ!!』という本だ。この本の著者は、中川翔子さんである。中川翔子さんは、タレント、女優、歌手、声優、マンガなど、多方面で活躍している。しかし、中川翔子さんは、中学高校と、いじめられていた。『死にたい夜』を何度も過ごした。そんな中川翔子さんが、いじめで悩む十代に伝えたいこと。それが、言葉とマンガで綴られている本。

私がこの本を読んで、印象的だった所は、中川翔子さんも体験した、『スクールカースト』の話である。中川翔子さんが、中学生だった頃。そのクラスには、『スクールカースト』というのがあったという。それは、クラス内でのランク付けのこと。一番上、高カーストの二軍は、にぎやかで、自己主張が強い人たちが属す。真ん中、中カーストの二軍は、おとなしい優等生タイプが属す。そして、番下、低カーストの二軍は、オタクやぼっちなどが属す。中川翔子さんは、ちょうどしたことで、低カーストまで落ちた、という。このスクールカーストは、身分が決まると、そこ

から上がるのは、ムズかしい。なので、中川翔子さんは、ずっと三軍の低カーストにいた。

そんな中、中川翔子さんには、何回か上にあがるチャンスがきた。けれど、二軍の子たちが話す会話についていけなかった。二軍の子たちがする行動に、逆らってしまったすると、すぐに低カーストの中でも、最下層におちた。それから、悪口を言われたり、陰口を言われたり。物を隠され、バカにしたように笑われた。隣に座り、わざと大きな声で、傷つく言葉をいわれた。いじめは、どんどんひどくなっていたという。話したことの無い子でも、いじめてきた。それは、高カーストの子が言ったから。二軍の子は、クラスに影響力がある。立場が上なのだから、したがわなければならぬ。だから、クラスのみんなは、中川翔子さんから離れていった、というのだ。

私が、小学五年生だった時。クラスでよくいじめが起きていた。その時のクラスは、スクールカーストになっていた。スクールカーストがクラスで、できてしまう。すると、いじめられる人がでてくる。私は、スクールカーストという制度が、いじめを発生させていると思う。私が五年生の時、すごく過ごしにくさを感じていた。スクールカーストは苦しいものだ。みんなが平等になれば、いいのにな。私がこの本を読んで、強く心に残った所は『逃げ道』

ではなく『違う道』という言葉だ。この本には、中川翔子さんが、つい最近までいじめにあっていた、ちほるさんにインタビューするページがある。そのインタビューのこと。ちほるさんが、いじめで不登校になっている方へ言った言葉。『逃げるのではなくて、違う道を選択する』と。自分に合わなかったり、『もう無理』と思ったら、『違う道』を探す。私は、この言葉を聞いて『逃げるって何だ?』と思った。私の人生は私のもの。私が道を決めていい。なのに『逃げる』って、もともと道が決められているみたい。逃げ

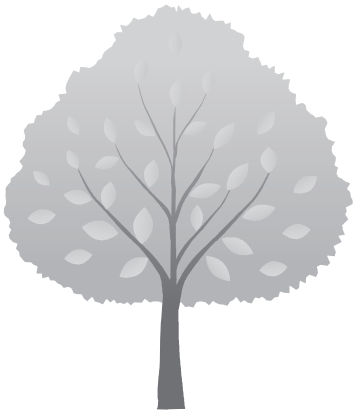
るのではない。自分に合った道を見つける。この考え方は、正しいと思った。あなたの人生はあなたのもの。私の人生は私のもの。誰もが、自分で自分の道を決める、権利をもっているのだ。

私はこの本を読んで、改めて『この世界には、いろんな人がいるんだなあ』と思った。いじめる人がいて、いじめられる人がいる。いじめを見ている人がいて、いじめを知らない人がいる。本当にいろんな人がいるんだ。

『みんな違って、だから世界は面白い』この本に書かれている言葉だ。みんな違って、みんないい。そうなるように。私は、いろんな人と関わって、いろんな人と、寄り添いたい。そして一緒に、笑い合いたい。だって、誰にでも、幸せになる権利がある。人権、があるのだから。

みんなが平等で、みんな、自分の幸せがある道へ歩いて。私は、みんなが幸せになってみんなが『生きたい』と思える、そんな世界にしたい。みんなが、人権を大切にする未来に、なるといいな。

「死ぬんじゃねーぞ!!」いじめられている君はゼツタイ悪くない
著 中川 翔子
文藝春秋



今後の未来に届け

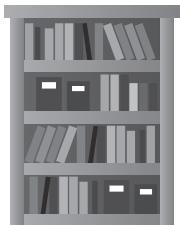
交野市立第二中学校 三年 甲斐 彩咲

私は先日こんなニュースを見た。インスタグラムの投稿が切っ掛けとなり、クラスメイトからいじめに会い、女子高校生が自殺したというものだ。そのニュースを聞いたとき、私は言葉がでなかった。衝撃だった。人の尊い命がありえてはならない行為のせいでなくなってしまうのだと考えると辛く怖かった。二度とこのようなことは起こしてはいけない、私のまわりの人が困っていたら苦しみを支えて必ず助けると私は決めた。

この体験から人見知りだった私が積極的に声をかけられるようになった。また周りをしっかりみて、クラスに馴染むのがしんどそうな人のそばに寄りそったりなどの行動を自然と心がけた。みんなのおかげでより生活が豊かになり楽しい。私もみんなに支えてもらっているなど心から思った。いじめをなくすことの大切さを得て、感謝し何でもすぐに前向きにがんばれるようになった。

人権を守るために人権問題について知識を深め、個性を尊重することが大切だと考える。相手を知り、受け入れることでそれぞれ自分らしく生きることができると社会を目指していきたい。今後の未来に届け。

「福」に憑かれた男
著 喜多川 泰
株式会社サンマーク出版



人権について二冊の本を読んだ。「福」に憑かれた男だ。この本は秀三という主人公が実家の長船堂書店を継ぐことから始まる。繁盛して成功する未来しか浮かべてなかったのだが、客は日に日に減っていつてしまう。ついに秀三は閉店を決意するが、ある老人が店を訪れたことから考え方・人生までもが変わってくるという物語だ。読んでみると気持ちがあたたくなくなり、人と人との奇跡の素敵さを感じた。私はこの本から主に二つの事を学んだ。一つ目は諦めないことだ。諦めてしまうことはいけないことではないと思う。けれど諦めないことは自分を強くする。諦めない芯の強さはかっこいいし、特別な出会いを与えてくれるということに気づいた。二つ目は自分を自分自身が一番信じ大好きになることだ。自分は入しかない。本質や感情も自分しか分からない自分だけの秘密の暗号だ。それを楽しみ大切にする。認めて信じて、全力で愛する。人のことを大切にする前にまずは自分を大切にすること。自分を大切にできないのに、人を大切にできる訳がないだろう。自分に自信がなく苦しんでいる人は多いが、大丈夫。愛する大切さを学んだ。

もっと自由に、もっと多様に

交野市立第二中学校 三年 佐山 由理菜

「女の子らしくしなさい。」そう言われるたびに、自分の中で不思議に思う。「らしく」ってなんだ。調べてみると、「そのものにふさわしい様子をしていること、まさにそのものであると判断される程度」と書いてあった。それなら「女の子らしい」ってなんだ。料理ができるとか、きれいな言葉を使っているとか。そんな回答ばかりだった。別に女の子だからといって料理ができなくても良いと思うし、きれいな言葉だって女の子だけでなく、男の子も使うべきだと私は思う。

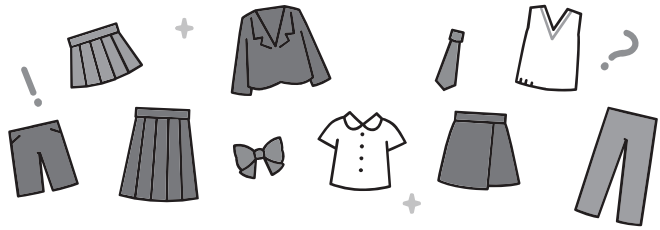
私はある本を読んだ。その本は、ある女の子が坊主頭で学校にあらわれたことから始まる。「女の子が坊主なんてへん」とみんなに冷たい目で見られてしまうが、主

人公だけは違った。本当に変なことなのか。ふつうじゃな

いのはダメなことなのか。と疑問を持ち、自分も坊主になって女の子の気持ちを知り、一緒に社会に抗議をするという話だった。坊主になって戦うことはとても勇気のいることだし、私には無理だと思った。でも、自分にできることを考え、それを行動に移したことは本当にすごいと思った。だから私も、私なりにできることを考えて行動できるようにしたい。女の子らしくを要求することは、その子の生きる幅を狭くすることになるのではないかと感じた本だった。

私は「女の子らしく」という言葉にとらわれず、やりたいと思うことがあるなら、男とか女とか考えずにまっすぐ突き進もうと思う。「みんな違って、みんな良い。」口先だけでなく、本当にお互いを尊重し合える社会にしていきたい。

「わたしの気になる女の子」
著 朝比奈 蓉子
ポプラ社



戦争の意味とは

交野市立第二中学校 三年 西岡 杏

「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」は、すべてにイライラした毎日を送る中学二年生の百合が戦時中にタイムスリップし、彰を始めとする特攻隊員に出会う物語だ。私は、この本を読んで印象に残った場面が二つある。

二つ目は、百合が初めて空襲に遭う場面だ。この場面では、空襲はすぐ近くで人が亡くなるのをただ見ることはできないことに衝撃を受けた。私は学校の授業で習ったため、空襲というものは知っていた。そして、その恐ろしさも分かっているつもりだった。でも、この本を読んで思い描かれた情景は、私が今まで想像していたものを遥かに超えていた。さらに、どれだけ人が助けを求めているも、自分のことではないで、誰も助けてくれないことにも衝撃を受けた。でも、もし自分が空襲から逃げているときに人に助けを求められたら、そこに迷わずかけつけられるとは言い切れない。なぜなら、そこで人を助けたことによつて、自分の命も奪われるかもしれないからだ。そんな考えにさせてしまう戦争に、私の恐

怖心はさらに強くなった。

二つ目は、特攻隊員の一人である板倉さんが、特攻を目前に逃げ出そうとする場面だ。この時代の男性は自分が特攻隊員であることを誇りに思い、お国のために死ぬことを喜ぶ。私は、このことをこの本を読んで初めて知り、とても驚いた。でも、板倉さんのように死にたくないと思っている人もいることを知り、少し安心した。なぜなら、死ぬことを喜んでほしくなかったからだ。世界には病気などで生きたくても生きられない人たちがたくさんいる。そんな中、健康な体に恵まれているのにも関わらず、自ら命を絶つことはおかしいと思う。だから私は板倉さんのような考えを持つ人がいて当然だと考える。そして、特攻を喜ぶ人もどこかで死にたくないと思っていると私は思う。

この本を読み終えて感じたことは、やはり戦争は誰も幸せにしないということだ。日本は第二次世界大戦でこのことに気づいた。そして二度と繰り返してはならないこと、忘れてはならないこととして、世代を超えて受け継がれている。でもその裏でまた戦争を続けている国がある。食べる物や住む場所を失って苦しんでいる人がいる。そんな現状を変えるために、今私たちができることは、日本の戦争に対する考えを世界に広めていくことだと思

う。このようなことを考えるきっかけとなったこの本は、世界中の人が読むべきだ。そして、一日でも早くこの世界から戦争がなくなり、全ての人が幸せに暮らせるようになることを私は願っている。

「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」

著 汐見 夏衛
スターツ出版株式会社



幸せを感じるには

交野市立第一中学校 三年 東谷 菜緒

私は『余命10年』という本を読みました。題名の通り、この本は数万人に人と言われている不治の難病にかかり、余命が10年であることを知らされた茉莉という女性が主人公の物語です。残された10年の中で茉莉がどのような人と出会い、どのようなことを考え、どのような最後をむかえるのか。そんなお話です。

皆さんは「もし家族が、友達が、自分自身が余命10年であると告げられたら、次の瞬間何をしようか」と考えたことはありますか。家族や友達であれば、その人のために何をしようかを考えたか、残りの時間を一緒に過ごしたりするでしょう。自分自身であれば、死ぬ瞬間や死んだ後の世界を想像し、恐怖を感じるでしょう。もしかすると、未来に対して諦めを持ち、死ぬことへの恐怖は薄れていくかもしれません。しかしそれは「幸せ」と言えるのでしょうか。私は死を恐れながら生きていく人生はとても辛く、幸せとは言えないものだと思います。

人権とは「幸せに生きることが出来る権利」のことです。茉莉は余命10年と宣告され、最初こそ未来に対する諦めから死への恐怖が薄れて淡淡とした生活を送っていましたが、なんとなくで始めた趣味に情熱を注いだり、ある人と出会い命が愛おしく感じるようになります。私は「後悔のない人生」というのは、難しいと思います。だからこそ、茉莉の死へと向き合いながらも今という瞬間を精一杯に生きる姿にすごく惹かれました。

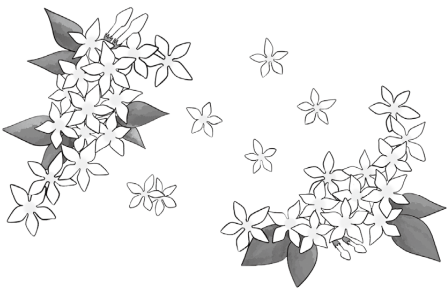
私はこの本を通して、過去の後悔を活かして今を生きることが、私たち人間が生きていく上で、最も大切であると考えました。後悔が残らないようにすることも大切かもしれませんが、ですが、後悔を二つも残さない人生はほぼ不可能だと私は思います。だから、何か失敗をしても落ち込んだり、開き直ったりせず、受け止めて次へと活かすことが幸せに生きることにつながるのだと思います。

また茉莉を見て、楽しいことだけが幸せではないことに気づきました。楽しいことが幸せだと感じるのは、当たり前の日常があるから。当たり前の日常ができなくなってしまうは、楽しいことも幸せだと感じれないとこの本が教えてくれました。

これからは、今までの自分の失敗を見つめ直し、今の

幸せへと繋げていきたいです。また、今が辛かったとしても未来に幸せを見出して、今何が出来るかを考えて行動していきたいです。

「余命10年」
著 小坂 流加
文芸社



講評

審査委員長 古川 知子
(神戸親和大学)

今年度「第42回入権啓発詩・読書感想文」に、大阪府内から4577点の応募がありました。内訳は、詩部門280点、読書感想文部門1777点です。

多くの皆さんが応募してくださったことに感謝しますとともに、30人の方の入選をお祝い申し上げます。

詩と読書感想文の部門ごとに、小学校(小学部)低学年・高学年、中学校(中学部)に分けて、審査委員の間で意見交流をし、入選を決めていきました。一人ひとりの子どもたちの心情や背景に想いを馳せながら、あれこれと話しあうことはとても貴重な時間でした。「広く子どもたちに読んでほしいメッセージ」であることを大切にしましたが、点数化して決めることへのジレンマは常にありました。

以下一部ではありますが審査会において審査委員から出た意見をご紹介したいと思います。

〈詩部門 小学校(小学部)低学年の部〉

「人の個性差をジグソーパズルに表現していてシンプルで面白いと思った。ピースがはまった時の「嬉しい！嬉しい！ありがとう。ぴよんぴよん」などの言葉の使い方が、すごく素敵な感じがして、作者が喜んでいるのが目に浮かぶようで、私にはとても好きな作品だ。」

〈詩部門 小学校(小学部)高学年の部〉
「ジエンダー平等の観点から言うと、性別の固定的な役割にしっかりと向きあい、子どもなりの意見と、こんな風にしていきたいというのが表現されていた点を評価していた。」

〈読書感想文部門 小学校(小学部)高学年の部〉

「(作者自身の)考えの方が優先しているような気がした。もつと感情を表現してくれていたら、さらに良かったのではないか。」

「絵本を題材としているが、絵本の感想文というよりは、自分の経験を元にした作品になっている。しかし、訴えるものがあり、「作文」であればすごく評価は高い。自分の体験のことを、もう少し絵本の内容と繋いでくれたらもっと良かった。」

「(相手の考えを)変えていけないかもしれないが、決して諦めないで伝えていこうという姿勢が読みとれて良かった。」

毎年のことなのですが、子どもたちが、さまざまなお表現をしてくれていること、保護者や教職員の方々が、見守ったり支援をしてくださっていることに心から感謝いたします。

入選作品集としてまとめ、大阪府内の各学校等において活用していただき、子どもたちの人権感覚の醸成に寄与できれば幸いです。